伊賀市教育研究センター　令和６年１０月３０日(水)　第４５７号

研修ニュース

〒518-0814
三重県伊賀市上友生 785 番地
Tel&Fax 0595-21-8839　E-mail　iga-ken@iga.ed.jp

今回は、B-６「生徒指導③」の報告です。

研修講座　生徒指導③
「QUの活用～スクールカウンセラーの視点から～」
【講師】　伊賀市教育委員会事務局　臨床心理士・公認心理師　木村　敦裕　先生

１０月１７日（木）、臨床心理士・公認心理師の木村敦裕先生をお迎えし、研修講座「生徒指導③」を実施しました。講義では、スクールカウンセラーの視点から活用の視点や活用の促進に向けて大事にしたいことなどについてご指導いただきました。

木村先生は、教師の中には、QU に対してハードルを高くしている先生がいると感じることがある。ぜひ QU を身近に感じてほしいといったことをお話しされていました。また、QU は「教員育成」のツールではなく、「児童生徒の持つ心的構造を把握」するツールであるということ、さらに言い換えると「子どもたちの変化を見守るツールである」ということを共通認識する必要があるという話がありました。たとえば、子どもたちの回答がプロットで示されていると、視覚的にも捉えやすいため、どうしてもそれを「学級経営に対する評価」「教師の評価」と捉えてしまいがちです。しかし決して教師の指導力を測るものではなく、アンケート結果から子どもの心がどう受け取っているか（子どもがどう回答しているか）を考えることが大切であることを学びました。そして、QU には、回答に係る時間も含めた簡便さはメリットだが、子どもたちの理解力による影響も受けやすく、アンケート調査ならではの脆弱性といったデメリットもあると指摘されており、「子どもたちの変化を見守るツール」として活用していくと有用である一方、QU が学級経営の成功や失敗を測るツールではないとお話しされていました。

QU 活用の促進に向けて大事にしたいこととしては、まず、担任としての視点（児童生徒の見立て）と QU の結果が違うことがあれば非常に有用な点になるというお話がありました。その上でアンケート結果から子どもの振り返り状況（子どもがどう回答しているか）を確認し、受け取り方の傾向（子どもが何を受け取っているのか）を捉え、児童・生徒同士の関係性に着目し、学級経営の方向性や個別の課題について整理していくことが大切であることを学びました。

講義の後半は、ペアで演習を行いました。それぞれが持ち寄った QU 結果をもとにして、A さんのクラスのアンケート結果から、B さんがどんな児童生徒かをイメージして「こんな子ですか」と A さんに尋ね、B さんがイメージしたことと A さんが普段接している子どもの姿と一致しているのか、一致していないとすればどういった受け取り方ができるのかを考え、QU を活用していくために、QU の結果と、子どもたちの様子とをどのような視点で捉えていけばよいのか学びました。

また、QU は学習の理解の程度、精神的な発達、社会性の有無、運動会や授業参観などの行事の影響も受けやすいため、そういった視点も含めて QU を読み解いていけば、非常に有用なツールの一つであるとお話しいただきました。

本研修講座で学んだことを還流いただき、今後の取組に活かしていただきますようよろしくお願いします。

アンケートより【一部抜粋】

・QU の活用方法を校内で共有し、効果的に指導に活かすと子どもたちの姿が見えやすくなると思いました。アンケート項目とプロット図の見方や考え方を正しく判断するために普段の様子と重ねて考えることが大切であることが分かりました。（小）

・今回の研修で、QU の結果を自分で読み解くことができてよかったです。自分で想像した生徒像と実際の様子が同じ部分と外れた部分がありました。QU をやることでグラフや数字に可視化されるのがすごく分かりやすくて、活用していきたいと思いました。（中）